会員研究

「大和守日記」
家康ひ孫大名の生活と人生〔その2〕

長尾正和

3. 藩政

1) 藩主役割

藩の統治は大名の本来業務であり、最重要課題だが、江戸幕府が始まって半世紀を過ぎたこの時期には、世襲制度の影響もあってか、統治者能力や責任感が希薄で藩政はすべて家老任せ、さらには、酒色や女色におぼれるような大名も数多く出てくるようになる。

しかし、曾祖父家康の血筋をまだ受け継いでいたのか、越後村上藩主直矩は家臣の人事、藩の財政、領知の安定等々、藩主としての広範囲にわたる事柄に常に関心を寄せていたことが日記のあちこちから読み取れる。

どの藩も家臣団構成は似たようなものだが、まず侍身分（士分）のものが中核にいて、加えて士分のない徒士・足軽・事務方小役人等がいる。この時代、この藩では前者が三百七十名前後、後者を含めた藩士総数では二千人を超えていたと考えられる。

最上級クラスは「寄合」と称され、家老、年寄、番頭等の役職に就ける家で、四十名ほどいた。次が奉行、組頭等の「役職者」で、百名前後、そのほかは一般武士（いわゆる平士）であるが、医師、儒者、事務方役人責任者等も士分が与えられていた。これらのものが「お目見」身分であり、藩主に直接会うことができた。日記に登場する家臣の名はこのグループの面々である。

2) 人事と家臣への気遣い

いつの時代でも、組織の潤滑な運営の基礎は構成員たちの人事であろう。

「日記」では、侍一人一人の加増、役職の任命、相続、改号（改名）、元服等々についてもその理由も含めて、直矩が自ら言い渡し、自身の「覚え」としてでもあろうが、詳しく記している。

寛文四年三月五日　晴天吉日

「居間にて、家老共連座中へ唐紙外し二の間に着座

下川又佐衛門敷居の端まで呼び寄せ、直ちに番頭そせう（ママ）の旨、年も寄りその上病者にも有之仕付けさる役に候間、迷惑に存知候の段、聞き届け難し、当年、江戸へ根村源兵衛供に行き候へば、跡は石川与五右衛門ほかはみな若き輩に候間、万端存じ寄りと云えども遠慮するべく、先当分その通りに差し置き候と述べる。（以下略）」

この日は二か月後の参勤出発を前にして、家老たち同席の中、二十数人の家臣たちを次々に呼び出し、自身の口から人事を命じている。冒頭は番頭役であろう下川又佐衛門の辞任願いについての扱いである。

番頭（ばんがしら）とは、三十人前後からなるいくつかの武士団のそれぞれの責任者で、年寄（老中）の次席という高い位置にあり、複数が任命されていた。

かれはおそらく高齢であり加えて病気気味であったのであろう。ゆえに辞職を願ったが、ほかの年長の番頭の江戸転勤があり、残りもまだ若く、みな殿に遠慮がちになるので、そのまま役を続けてほしいと命じている。

このあとにも、数名の組頭への任命や、功績のあるものへの加増等々を言い伝えたことが書き連ねられている。それぞれについて、理由を明確にした上で伝えているが説明には納得感がある。

家臣たちへの思いは、それぞれの健康にも及ぶ。

寛文二年七月六日

「言渡は　家中侍歩行其外之物

迄　残暑甚敷候間、煩候わぬように身を持候得と可申度旨　言付　番頭村野九郎三郎、螺江三郎兵衛伝也」

旧暦のこの日は西暦では八月下旬、よほど暑さが続いたのか、二人の番頭に対して侍たちはもちろん徒士に至るまで、夏バテに注意するよう伝えよ、と命ずる。

長年にわたり藩に貢献してきた家老が亡くなった時にも、いろいろ心配りしていることがわかる。

小河原武太夫は、直矩の父直基の二歳年上で、直基が大名になる前の越前福井からの家臣であり、越後村上時代に家老職となり、藩でも最上位の禄高二千三百石であった。姫路移転のときは筆頭家老ですでに六十二歳、直矩から見れば父のような年齢であり、存在であったのであろう。

直矩が姫路転封の命を受けるために江戸に向かった時の、わずか六泊七日という強行軍に武太夫も同行した。

その二か月後には、江戸から十七泊十八日後の八月二十二日には藩主と共に姫路に到着し、城を受け取る担当家老として総指揮を執った。

その重責と身体的負担もあってか姫路到着の一か月後、九月なかばには体調を崩してしまった。直矩は容体を気にかけそのあと数回様子見の使者を出し、途中快方に向かっていることなども確かめていたが、一か月後の十月二十四日には亡くなってしまう。

嫡子の小河原権八及びその母（武太夫妻）にはすぐにお悔やみを伝えるとともに、権八に家督相続を言い渡している。

3）藩財政

かれは藩財政についても自ら目を通す。

寛文三年十一月三日

「万端勘定所之済み帳が出来家老共並びに勘定奉行共に出て之帳を読む　家老共印判して手塚、三上に相渡し　去年・当年の知行高の書付も持ち出すなり」

家老たち同席のもとで勘定奉行二人から報告を受け、内容を確認し承認する。このあと、二人にはその労に報うためそれぞれ五十石を加増する。

これも小河原武太夫の話だが、前述の姫路城受領の翌々日にはかれがやってきて藩の財政が大きく好転する、すなわち、表高は十五万石とこれまでの越後村上と変わらないが、姫路での実高はこれより四万石は多いことを報告する。

直矩はその使い道について、一万石ずつをそれぞれ藩所有の艇、用金、遺物、知行等に配分するようその場で指示する。

姫路藩は瀬戸内での警備も担当しており、もともと所有の船舶も多く、村上から来たこの藩にとっては新たな経費が増えたことになる。前藩主榊原家から引き継いだ船舶は最大六十丁立を筆頭に三十数艙であることも分かり、その明細も記している。

用金とは、藩の借入金の返済かもしれない。また遺物とは姫路城を含む既存の資産であろうか。姫路城のメンテナンスには歴代の姫路藩主たちはかなり苦労をし、費用も相当掛けている。

また、家臣たちへ報いることも忘れず、新知、加増にも一万石を使うこととする。

4）山狩り

江戸時代の軍事訓練の一つが山狩りである。寛文二年と四年の正月は村上にいたが新年の儀式を終え、両年とも冬場ながら五日には大規模な山狩りを実施する。

寛文四年正月五日

「晴天　但朝之内也　昼雪時々降　山居狩り卯ノ上刻出　供五番也　当番之他三番四番六番七番八番思々出　此の他武頭　但当番火番之外　使番　同断　組頭　目付　同子共　於桜馬場二逢　小河原武太夫　根村源兵衛多賀谷左近番頭　沼田主計兄弟同子供は山へ先へ行く・・・列卒数千二百五人・・・物数之覚・・・総数五十七」

越後村上はいわゆる豪雪地帯だが、この日朝は晴天なるも昼頃から時折雪がぱらつく。朝六時、城の馬場に集まり山狩りに出る。自ら先頭に立ち、家老二人、番頭、組頭、平士、そのほかを合わせ総勢千二百五人の大部隊であった。

途中全員弁当を食べ、狩りが終わったのは申の刻、午後四時前。戦果は雉、山鳥、兎等ではあるが総数五十七であった。「物数之覚」として誰が何を捕獲したかを細か

く記している。

山頂に村上城があった村上市臥牛山
（村上市 WebSite 所載）

5）軍書講読

軍事面では、自らも勉学を心がけている。おそらく家臣であろう儒者を呼び、数日にわたり軍書の講義を受け、さらに中国兵法書の「三略」も読んだことを記している。

4．参勤交代

1）実施状況

この日記の始まりが明歴四年（１６５８）十七歳の時であることはすでに触れたが、直矩が初めて村上入りしたのはこの年の七月二十九日である。

父が急逝し、その跡を継いで越後村上藩主の地位についてから、ここまでのほぼ十年間は江戸住まいということになる。おそらく元服して村上入りをしたのであろう。

大名たちにとって参勤交代は軍事的な義務であったが、直矩の参勤交代が始まったのは村上入りのわずか半年後であった。

そののちの村上藩主時代の参勤交代は二十六歳まで次のように行われた。

万治二年（１６５９）
一月二十二日村上発江戸へ
寛文元年（１６６１）
五月二十五日江戸発村上へ
寛文二年（１６６２）
四月三日村上発江戸へ
寛文三年（１６６３）
六月十一日江戸発村上へ
寛文四年（１６６４）
四月二日村上発江戸へ
寛文五年（１６６５）
五月十六日江戸発村上へ
寛文六年（１６６６）
四月十二日村上発江戸へ
寛文七年（１６６７）
五月十三日江戸発村上へ

初回を除いて、江戸参勤の村上発は四月、江戸からの帰国は五月、あるいは六月発、また日程は基本的に参勤および帰国共に九泊十日である。

江戸から村上までの距離は大まかにみて三百五十kmほどと考えられるので、およそ九十里弱となる。この時代成人男子は一日十里歩くと言われているので九泊十日はかなり妥当な日数である。

また、参勤と帰国は一年ごとに繰り返されるが、初めてであった万治二年（１６５９）の参勤のあと、村上に戻ったのは、上の通り一年四か月後であった。前年には帰国しなかった理由について、

万治三年（１６６０）四月七日
「上意の由にてご老中より、（途中略）当年は在江戸大名衆が少ないので、ご当地に詰申すべき、・・・」

との命があったためとしている。しかし、この翌月にはかれは伯父越前松平出羽守直政の娘と婚儀を挙げることになっていたので、かれの周囲が幕府に働き掛け、帰国しないで済むようにしてくれたのだろう。このような周辺あるいは上部からの気配りは現代でも組織内でしばしばみられるであろう。

江戸から村上への通常のルートは、千住から奥州街道で北上し白河まで進み、そこから西に逸れて猪苗代湖西側を通る会津東街道（会津通り）を利用し、会津若松経由、阿賀野川河畔の津川まで行く。そこからは山中を真北に向かい越後街道（若松街道）で新発田まで進み、村上へ行く道である。現在この津川から北の山中のルートの一部は、実質的に消滅している。

例外が二回ある。先に触れた万治二年の直矩初の参府は、これではなく、日本海沿いの北国街道を越後高田まで行き、そこから南下して信州上田、小諸、碓氷峠を経て中山道に入り江戸へ出ている。

越後高田経由としたのは、藩主の松平光長に会うためである。かれは同じ越前松平家、福井藩主忠直の長男であり、直矩より二十七歳上のいとこにあたるが、先にも述べたがかなり親しい付き合いをしていた。それもあって、だいぶ後の話にはなるが、直矩は越後高田藩のお家騒動、「越後騒動」に巻き込まれ、人生が大きく変わることになる。

それはともかく、このときは光長からのおもてなしはもちろん、

隊列全体が高田藩の領外に出るまで、鄭重に迎えられている。

そこから南下し、長野でも善光寺に参詣しているため、いつもより二日ほど余計にかかり十一泊十二日の旅となった。

このルートは豪雪地帯やかつ碓氷峠を越えるので冬場の参勤は難儀では、と想像されるが、大きな困難はなかったようである。

寛文三年（１６６３）の帰国のときもいつもより二泊余計にかかっている。曽祖父家康公を祀る日光東照宮社参のためである。

起点の千住から宇都宮までは奥州街道を、そこから西に日光街道で今市を経由して、日光を訪れ、供の家臣一同を含め社参した後、再び奥州街道に戻り、そのあとは通常のルートである。

寛文五年（１６６５）の帰国の際も今市まで同じ日光街道を使っている。社参はしていないが、そこから奥州街道の西側に平行に進んでいる会津西街道と呼ばれる道で会津若松まで北上している。途中には今でも当時の宿場町の姿を残している大内宿がある。

話はそれるが、英国の女性探検家イザベラ・バードが明治初期に西洋人女性として日本各地を訪れ、明治十一年（１８７８）六月日光から藤原宿、五十里宿、大内宿等を経て会津若松経由で津川まで十七日間かけて旅をしたことを綴っているが、それがこの街道である。

現代の大内宿
（筆者撮影）

彼女は日光を出てから、「山と峠、谷間と水田、次に森林と水田」等の美しき景観を感嘆しているが、同時に道路も悪くかなり厳しい旅であったことも述懐している。（イザベラバード「日本奥地紀行」）

２）参勤

これらの参勤交代日程は藩が勝手に決めているわけではない。幕府の許可をすべて得なければならない。ほかにも実施までの手続きや行事は多い。

直矩二十三歳のときの寛文四年（１６６４）四月の江戸参府に随行する家臣たちの選考については、半年前となる前年九月には家老たちと打ち合わせている。江戸に行けばその後江戸詰めとして単身赴任となるものもいるので、家臣・家族への配慮から早目の決定と事前通知は大事なステップである。

現代においても多くの企業や組織で行われる社員の転勤で、このように前広に本人に通知しているかといえば、そうではないであろう。

参勤時期について幕府へお伺いし許可を得たのは前年十一月である。

寛文三年十一月三十日

「雪降　長尾清兵衛首尾よくし廻り　十三日に奉書提出　十四日江戸発足し申の下刻到着　・・・

参勤支度の旨　ご老中に書状を以てお伺いした処　御定めの如く四月中参府するよう仰せられ・・・二十日ご老中四人連判にてご奉書来る・・・」

十一月に入ると翌年四月参府の幕府承認を取り付けるため、殿の代理である使者が江戸に赴く。

この記事は、使者が大役を終えて帰国したことを記したものだが、老中から口頭で四月参府の指示があったことを報告している。幕府はこの決定を文書化して、老中奉書の形で返事を出すが、かれはそれも受取り直矩に届けている。

このあと、担当する家臣たちは道中の宿泊先の調査や手配、また、持ち運ぶ道中道具の準備等を行う必要がある。出発のひと月近く前には供のものを最終的に決め、それぞれの役割を明確にしてあらためて徹底する。

発駕、すなわち駕籠での出発の日が近づくと、直矩は松平大和守家の菩提寺である孝顕寺等々いくつかの寺を訪れ、ご先祖等にお暇乞いをする。二、三日前からは、宿泊先担当や道中目付、小姓等が一番立、および二番立として出立する。その際にはかれらが都度挨拶に来るが、それぞれにねぎらいと激励の声をかけている。

前日の晩には、国元に残る家老、諸奉行、大目付、群代等を集めて留守中の役義をあらためて言い渡す。

このあとは重臣や、側近、さら

には日ごろ身の回りの面倒を見ているお付き女中たちも集めての宴席が催されるが、いつも大いに盛り上がるようである。

発駕当日の朝は早い。まずは重臣たちを集め料理とともに三献の儀により盃を交わす。今では神前結婚式で行われる三々九度の祝のことであるが、もとはといえば出陣の儀式である。直前には番頭、組頭等々の面々から書院で挨拶をうける。

出発時刻はおおむね辰の上刻、朝七時すぎ、馬場で侍全員が集まりお見送りする。供侍は先立ちを含め四十名ほど。ただし、ほかに各侍にはそれぞれに陪臣が、また、多数の荷物持ち、馬廻役等々も加わるので、行列全体は数百人となる。正確な人数を示す資料が見当たらないが、600人ほどではなかったかと推定されている（「村上市史」）。

江戸に着くと直矩は上野烏越にあった中屋敷に入り、旅装束から改めたのちに上屋敷である御成橋屋敷に入る。到着時刻は大体丑の刻、正午から午後二時頃であった。かれは行動的で、時にはその日のうちにまずは越前家一門に無事到着のむね御礼の連絡をする。また、老中に参勤挨拶のための登城日の伺いを出す。数日後には江戸城に出向き、将軍家綱や老中等の高官たちに会い、無事参府できたことを報告するとともに、礼を伝える。

翌日にはこれまで江戸の留守を守っていた家臣たちに褒美を渡し、帰国すべき家臣には暇を申し渡す。

3）帰国

反対に江戸から帰国するときは、その時期についての承認、供侍の決定、道中の諸準備等は同じだが、直矩が最も忙しいのは、関係大名への帰国挨拶である。

まずは登城して将軍家綱にお暇乞いをする。さらには将軍家一門や大老酒井雅楽守を始めとして老中たち、そのほか在江戸の親しい大名から始まり、越前家一門等の屋敷にも出向いている。また、将軍家菩提寺である増上寺の参詣も欠かせない。

家臣に対しては江戸屋敷の留守を預かる家臣にそれぞれの役割を確認し申し渡す。

国元の村上に着くと在国の総侍がお出迎えする。

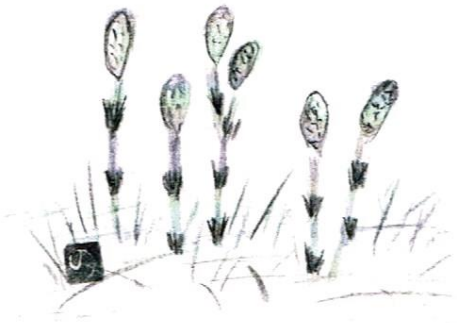
寛文七年五月二十二日

「牛の后刻　村上城へ入　町端より大糟毛の馬に乗　安福前より歩行にて城へ入　侍ども不残桜馬場に居並び逢う・・・」

帰城したあとは家老、番頭など重臣を始めとして、目付、大役人等々を集め、一人一人の名を挙げ、留守および供のものの功に対して熨斗鮑を遣わしている。

無事に帰国できたことは幕府にすぐ報告しなければならない。参勤御伺いと同じく、ここでも上級家臣が使者としてその役割を担い、直矩帰国の翌日には江戸に向かい出発するのが慣例である。

その朝は使者のため、家老も含めて送迎の食を共にする。このあと使者に託する書状を直矩自身がしたためる。老中への報告書や江戸滞在中の諸大名への礼状を含めると二百二十通余りであったと書いている。

道中の疲れもまだある中、短時間にこれだけ多くの手紙を用意できる体力にはやや驚かされる。

（以下次号）